

血管解剖からみる医学の歴史：History repeats itself.

Are we anywhere close to Esculape? – 解剖と医学を振り返る。。。

キッティポン スイーワッタナクン

Kittipong Srivatanakul,MD

旭中央病院 脳神経外科血管内治療部

我々が当たり前のように知っている解剖学 (anatomy) の知識は解剖 (dissection) なしでは成し得ないものである。 現在のように生きたままでも「解剖」ができる画像診断が進んだ事態とは違い、昔は解剖の概念ははっきりしなかった。 解剖学が乏しかった時代でのまじないのような治療から医療は始まり、解剖学の知識とともに発展してきたとも言える。

3つの時代

1) 解剖の知識が乏しいまたは正確でない時代

人類にとって医療とは他人に対して、助けの行動をとったときから始まったのかもしれない。 しかし、正確な診断治療には解剖の知識は必要である。 エジプト文明ではミイラを作る過程で一種の「解剖」を行っていたが、この時代においては心臓と腎臓が重要な臓器と考えられおり、残念ながら脳は鼻腔や眼窩経由で除去されていた。 解剖の知識ははっきり残されていないが、パピルスでの外傷治療の記録では心臓からあるゆる臓器に血液が送られているという知識は部分的に残されているから血液の流れの知識はあると推測される。 紀元前の時代ではEmpedocles(480 BC)達は血管内を流れるのはpneumaと考えていた。 人体解剖の記録はこの時期から残されており、やはり心臓は生命と中心と考えられていたが、解剖時に血液よりも空気が確認されたために血液と心臓の正確な理解はされていなかった。 約500年後のガレノス時代 (130-200AD) になって、血管の中を血液が流れていることが動物実験などで確認されるようになったが、pneumaの概念はこの後まで活かされていた。 この時代での画期的な出来事はおそらく研究目的の解剖が確立されたことであろう。

2) 解剖で人体の構造を本当に知る時代

16世紀になり人体解剖を本格的にできるようになり、この時期の解剖学者として、知らない人はほとんどいないと言えるのはヴェサリウスであるが、同時期にフランスではシャルル・エティエンヌによる別の人体解剖書が発行されていたが、有名ヴェサリウスのファブリカよりも2年あとのことであった。(1545年) 印刷技術が発達し始めたルネサンス時代でもあり、今までの解剖の常識が変わり始めた。 エティエンヌは仲間に恵まれず結果的にはファブリカが大評判となり、当時でも海賊版が出回る補との人気であった。 ようやく血液の循環の概念が完成したのもこの時代である。 この時代の決定できた出来事はおそらく正確な観察から生まれる解剖、生理学の知識であろう。 この時代の発展は著しく、ヴェサリウスから始まり、デュレーにつながっていく大切な時代であった。

3) 解剖しなくても体を理解できる時代

レントゲンの発見(1895)によって人類は初めて、メスと入れずに人体の内部が見えるようになった。 しかし、発見されたあとにしばらくの間放射線被曝の概念はなく、ゲームセンターなどでコインを入れれば

自分の手の骨が見えたり、レントゲンを作る仕組みはさほど難くなかったため、日曜大工的にレントゲンセットを組んで、自分で撮影して、ドクターにコンサルトするような時代もあった。この時代の人々は体の中が「見える」ことによりかなり興奮を覚えたはず。気脳撮影から脳血管撮影に発展し、その延長にわれわれが診断装置を動かす度に「解剖」の知識がより磨かれていく時代となった。

近代医学の発祥の地がギリシャだとすれば、はたして現在の我々は彼らが望んでいた医療に近づいているだろうか。これについても私見を述べる。